

「野球大国」ドミニカの秘密

窪田 暁 くぼ た さとる 民博 外来研究員・京都文教大学実習職員

「ハングリー精神」というイメージ

今年の三月に開催された第三回ワールド・ベースボール・クラシック(WBC)は、ドミニカ共和国(以下、ドミニカ)の初優勝で幕を閉じた。予選から決勝までを全勝で飾る完全優勝のおまけつきで、あらためて「野球大国」の実力を世界中の野球ファンに

みせつけることになった。WBCの開催中、いくつかのマスコミがドミニカを特集していたが、一様にその強さの秘密にせまるといったものだった。そこでは、ドミニカの子どもたちにとって、貧困から抜け出す唯一の手段が大リーガーになることであり、そのような環境のなかで育まれた「ハングリー精神」が、多くの大リーガーを生み出す理由であると説明されていた。たしかに、選手の大半は貧困家庭の出身で、学校を卒業しても安定した仕事につける保証などなく、野球で一攫千金の夢をかなえたいと願う少年は少なくない。だが、大リーガーの数だけでは計れない深遠さがドミニカ野球にはある。

野球をとりまく人びと

ドミニカには大リーグ三〇球団が選手発掘・養成施設(アカデミー)を設けている。各球団は国内全土にスカウトを派遣し、優秀な野球少年がいればトライアウトを

うけさせる。合格した少年に支払われる契約金は、平均で二七〇万円。貧困層の月収が二万円にも満たないことから、大リーガーではなく、アカデミー契約が少年たちの現実的な目標となる。彼らを指導するのがブスコン(探す人)とよばれるコーチ。毎日、無償で練習につきあう



路上で野球をする子どもたち(ドミニカ共和国パニ市)

自宅に住まわせ、食事やプロテインを与える。母親は息子が野球で稼ぐことを期待し、父親は野球以外で稼ぐことの難しさを身をもって教える。近所の大人は大リーガーにたかり、昼間から野球賭博場にいりびたる。野球少年はそんな大人たちの背中を見て育つのだ。一方、大リーガーになれなかった元アカデミー選手は、移民としてアメリカに渡る傾向にある。契約金で購入した家の所有証明書のおかげでアメリカのビザが取得しやすく、車や家具を担保にすれば渡航費用を工面できるからだ。アカデミーの契約金を元手に第二の人生を切りひらき、いまでは故郷の家族を支えているのである。

大リーガーはもとより、アカデミーをめざす少年と彼らを支える大人たちがいる。そこには野球をとりまくさまざまなアクターの「したたかな」生きかたが見え隠れする。それらが幾重にも層をなし、野球大国の底辺を彩っている。それがドミニカだ。